帝塚山大学短期大学部紀要　第41号　一～九（二〇〇四）

中世文藝と地域伝承

――文覚発心の物語をめぐって――

小林美和

一人の男の横恋慕故に、夫への貞節と母への孝養との板ばさみになって、自らの命を絶つに至った女房の物語は、いわゆる文覚発心の物語として古くから人口に膾炙している。この物語がどのようにして成立し、どのように流布変容してきたか。これについては、諸説が行われ、今なお定説をみない。本稿は、この点について、直接的に言及するものではないが、中世から近世にかけて巷間流布したこの物語の背景に、その地域的性格と、伝承基盤という要素を読みとってみたいと考える。そして、その要素が、この物語の成立と、或る意味において抜き差しならぬ関係にあることについて述べてみたい。

一　淀川水系の物語

この物語に通底する基本的要素の一つに、渡辺橋の橋供養というモチーフがある。これは、一見物語の主要な筋立てとは無関係のようではあるが、実は、物語成立の基盤と密接に関わっていると考えられる。

鎌倉期の成立と目される延慶本『平家物語』(1)では、文覚発心の物語を渡辺橋の供養の場面から語りはじめる。

然ヲ此内ヲ罷出テ後、渡辺橋供養之時、希代ノ勝事ナリケレバ、江口、神崎、柱本、向、住吉、天王寺、明石、福原、室、高砂、淀ヤ、河尻、難波方、金屋、片野、石清水、ウドノ、山崎、鳥羽ノ里、各ノ歩ヲ運ツ、、霞ノ裏ニ珠ヲカケ、長柄ノ橋ノ如クニテ、不朽トゾ祈リケル。

これは、渡辺橋供養という一大セレモニーを一目見ようと、近隣から大勢の見物人が押しかけた様子を述べたものである。ここで注目すべきは、ここに登場する地名がすべて京都と大阪を結ぶ淀川沿岸の名だたる河港の地とさらには大阪湾から播磨灘に至る港地を上げている点である。淀ヤは淀屋、難波方は難波潟、片野は交野、ウドノは鵜殿である。そして、この詳細な地名の列挙の中にこそ、この物語の成り立ちを窺わせるものがあると思われる。さらにいえば、渡辺党の拠点たる摂津渡辺と淀川の上流鳥羽の里を結ぶ淀川水系がこの物語をはぐくむ揺籃の地であったと考えられる。そのことは、この物語が、

在俗ノ時ハ、渡辺ノ遠藤武者盛遠トテ、上西門院ノ武者所ニテ、久シク龍顔ニ仕ヘテ、飲羽ノ三威ヲ施シ、専ラ鳳闕ニ侍シテ、射鵰ノ名誉ヲ振ヒキ。

と紹介される、渡辺党の遠藤盛遠（文覚）と、鳥羽の里の住人、鳥羽の刑部左衛尉門渡、さらにその女房との間で繰り広げられることに示されている。ことに、鳥羽の刑部左衛門渡という名は、単なる固有名詞ではなく、後述するように、一種象徴的意味を持つ名前として受けとめるべきであろう。

ここで、以後の論証を進めるために、少しく淀川の概要を摘記しておく。淀川[2]は、琵琶湖に源を発し、京都盆地を横切ってから大阪平野に入り、南西方向へ流れて大阪市内を貫流した後に大阪湾に注ぐ河川である。淀川水系の最大の水源は、琵琶湖水系で、瀬田川から流出して宇治川と名を改めて京都盆地に入り、京都府と大阪府との境界をなす山崎の狭隘部において、木津川と合流して大阪平野にはいる。淀川の名称は、『日本紀略』延喜一八年（九一八）八月一七日条に初見する。京都盆地の最低部に巨椋池があり、ここに東から宇治川が、北から葛野河（桂川）、南から泉河（木津川）が流入し、平安京造営後にこの湖水の北に与等津（淀津、現京都市伏見区）が設けられた。平安京の外港として羅城門から鳥羽造道が建設され（のち淀路ともよぶ）、山陽道・南海道などの西国方面から官物や庄園の貢租物が陸揚げされ、ここには朝廷の供御所などがあった。したがって淀津は淀川流域のみならず、南西日本における最も重要な水陸交通の要地として繁栄する。

また、淀川河岸の低湿地は、早くから放牧地として利用されていた。『延喜式』には、左右馬寮所属の鳥飼牧（現攝津市）、美豆牧（現京都市伏見区、京都府久世郡久御山町）、典薬寮所属の味原牧（現東淀川区）などの官牧をあげ、古代から中世にかけて、公私の牧野が、淀川、大和川、鴨川、桂川の河岸に経営された。そして、古代淀川の渡河地点としては、宇治橋・泉大橋・恭仁大橋とともに、山崎橋（現島本町）、高瀬大橋（現守口市）・長柄橋・中河橋・堀江橋（現大阪市）などが架橋されていた。そして、平安遷都後は、与渡津（淀津）がその中心となり、上流には岡屋津・宇治津（現京都府宇治市）、下流には山崎津江口、渡辺津（現東区）、神崎・河尻（現尼崎市）などの河港が発達した。

そして、平安期から中世を通じて庄園領主経済と全国的な商品流通の中心地である京都と他地域との幹線交通路としての役割を果していたのが淀川であり、淀川に沿った河港には、問丸・座・土倉などの商人、船頭・馬借・車借などの運送業者、各種の手工業者、旅館業者、遊女などが集中し、市場が開かれ、都市化が進展した。

要するに古代から中世にかけ、淀川は京都と西国を結ぶ重要な幹線交通路であったことになる。その中で、渡辺[3]は、摂津西成郡にあって淀川が大阪湾に注ぐ河口に位置し、古くは大渡、窪津などとも称された渡渉地である。平安時代より皇室領大江御厨の中心として供御人が居住し、魚類などを貢進した。また交通の要所でもあり、京より四天王寺・住吉神社さらに熊野へ参るには、淀川を船で下り渡辺で上陸し、熊野街道を南下する。淀川で京と、また大阪湾で西国と結ばれ、熊野街道の起点でもある重要な港津であった。渡辺党が平安末期から中世にかけて、この渡辺の地を拠点として活動した武士集団であり、

彼等が大江御厨の供御人集団の統括者であった[4]ことは有名な事実である。

一方、鳥羽の地[5]は、山城国紀伊郡の平安京真南の一帯を指し、現在京都市南区上鳥羽と伏見区下鳥羽に分かれている。『和名類聚抄』に「止（度）波」と訓ずる。桂川と鴨川合流点に近く、低湿な平野を形成するこの地には、鳥羽津がおかれ、平安京羅城門から南に直進する鳥羽の作道が貫通するなど、古来水陸交通の結節点として京郊の要衝であった。そして、この小稿では考察の対象としないが、現在の上鳥羽、下鳥羽いずれの地にも文覚発心説話が伝わることは、よく知られた事実である。

吉田東伍編『大日本地名辞書』の「渡辺」の項に、文覚説話を引きながら、

> 按に城州鳥羽に恋塚と云ふものありて、袈裟墓とも伝ふ。然れとも、其人々の故園は渡辺に在ることなれば、此地に墓を築きたること疑なし。後世遺跡を伝へざるは、惜しき事ならずや。

とする記述がある。ここには、文覚（盛遠）のみならず、この物語に登場する人物が渡辺党ゆかりの人物であるとする認識と、その遺跡が京郊鳥羽の地にあって、肝心の渡辺の地に伝えられていないことへの遺憾の意が示されている。この物語が渡辺党の物語であるという認識からすればもっともな感想であるが、この二つの地が、淀川水系の水運文化によって密接に結ばれているという観点からすれば、これは、かならずしも不思議とするに足らない。

文覚の出自とされる遠藤氏は、渡辺党の一流であるが、その氏系図たる『遠藤系図[6]』には、次のような内容の記述が見られる。

> 民部卿藤原忠文は、平将門追討のため坂東に派遣されたが、その途次、遠江国焼風の里で一子を儲けた。その名を焼風三郎公時といった。後に、その子息遠藤六郎為方は、国吏として上京、摂津守として摂州一国に遊び、その地で妻を娶り、その縁で渡辺の地に居住、十人の子息を成した。また、宇治鎮守理久大明神は、藤原忠文を祀ったものである。それは、忠文が将門追討に出兵したものの、勲功の賞に預かれなかったことを恨み、宇治の里に籠居、一夜のうちに冠より白髪が生え出たということがあった。この件に関して右大臣実頼が忠文を処罰したところ、実頼の二人の子は一夜にして命を失った。そのため、忠文を神と祀った。宇治の里は、忠文の私領であった。

以上は、『遠藤系図』の序文の記述である。遠藤氏の出自を、崇神となった藤原忠文と結び付けたところに特徴がみられる。ここには、一族の出自とアイデンティティを、歴史上の人物である藤原忠文に結縁し、崇神転じて宇治の氏神となった理久大明神の祭祀者であることに求めようとする主張を読み取ることができる。青山幹哉氏[7]によれば、こうした氏の系図が作成されるのは、鎌倉期以降のことであり、それは、主として氏族の存在の主張という意図のもとになされたという。

そして、『遠藤系図』の「公時」の項には、焼風三郎遠江守の名を付して、「父忠文依将門追罰之賞。蒙大遠藤宣旨云々」と注記し、さらに、その子「為方」の項には、「惣官、摂津守、遠藤六郎大夫」として、

> 号窪津大夫。自是當国渡辺惣官始也。此時自宇治里渡辺ニ移住

也。一国田文目録ヲクリテ。十人ノ子息ノタメニ。始テ田畑屋敷ヲ立置。爰私領ト今名号スル田畠屋敷等是也。

と注記している。この記述により、渡辺党遠藤氏の実質的な始祖が、遠藤六郎為方であり、この代に宇治の里から摂津渡辺に拠点を移したこと、さらに渡辺惣官の始めを渡辺党のいま一つの流派である源姓渡辺氏ではなく、遠藤氏であるとする主張を読み取ることができる。惣官とは大江御厨供御人の統括者のことであり、代々渡辺党の者がその地位に就いた。

いずれにしても、遠藤氏が宇治の里との地縁を説くことには注目しておきたい。宇治の里もまた、淀川水系の一翼を担う地であった。

二　検非違使の物語

延慶本『平家物語』をはじめとして、文覚発心の物語を伝える諸伝承が、盛遠と刑部左衛門尉女房との出会いの場として渡辺の橋供養に言及することの意味については、改めて考えてみる必要がある。延慶本、四部合戦状本、『源平盛衰記』等の『平家物語』諸本、御伽草子『恋塚物語』、『滝口物語』、さらには同じく『猿源氏』所引の当該説話等々、いずれもが橋供養を出会いの場とすることは、単に物語の筋書上の問題とは思われない。それは、おそらくこの物語が渡辺党を中心とする淀川水系の河港の地に暮らす人々の間に胚胎し、伝承されてきたからだと思われる。その意味で、渡辺の橋供養は一種象徴的意味を担うものといえる。

また、女房の夫たる鳥羽の刑部左衛門尉の名についても、その象徴性を読み取る必要があるであろう。物語の表面上では、固有名詞であるこの名は、実はこの人物の歴史的実体を指し示すものといってよいであろう。鳥羽という京郊の要衝をなす河港の地名と刑部左衛門尉という刑吏を意味する名の結び付きは、われわれをして否応なく、検非違使と河・津との関係に導いてくれる。いま、加地宏江・中原俊章篇『中世の大阪』[8]により、この点をみてみたい。

検非違使は九世紀初に成立した検察を任務とする機関である。検非違使には、衛門府の官人が当てられ、京中の治安維持に当たるとともに各地に派遣されて警察活動を行った。なかでも特に津頭は犯罪人も多く、十世紀初ごろ山崎・淀・大津など淀川流域の津は検非違使による津廻りが行われ、定期的に巡回がなされるようになった。検非違使の津に対する権限は警察活動から始まったと考えられる。しかし、検非違使と津との関係は、検察のみに限られたことではなく、京から瀬戸内海を結ぶ交通路の確保という重要な任務が与えられていた。たとえば、高野山への参詣は、京より船で淀川を下り、渡辺か堺あたりで上陸し、陸路をとるのが普通であった。水路の重要さを示すものであるが、この「道」の整備は、検非違使が担当し、津刀禰たちを指揮し船の準備や人夫の調達をした。このような検非違使の活動は、法皇や天皇の行幸、関白家の参詣に必ず見られた。当時法皇は頻繁に石清水・高野山・天王寺に出かけていたが、そのおりにもやはり船が利用されることが多く、準備は検非違使が当たっていた。他にも非人を指揮して道の掃除（清目）をしたり、橋の必要な場所には浮橋を設置したり、そのための物資の点定や人夫を集めることは検非違使の仕事であった。つまり、交通路の確保は検非違使の重要な役割であった。この

検非違使の活動がみえる範囲は、桂川・淀川・大和川・神崎川など京から瀬戸内海へ通じるルートが中心であった。しかし、伊勢神宮への使が通る伊賀や大和国の道・橋の巡検が検非違使によって行われたこともあり、さらに、宇佐八幡宮への使が播磨国から乗船した時に、検非違使がその港を支配していた例がある。さらに、天皇に直属する御厨が多く設けられ、中央政府の河・津に対する支配権が強化されていく過程で、検非違使が河・津を管理することになってゆく。一一世紀にも淀に衛門府の「御贄所」が見え、衛門府に属する狩取が漁業に携わり御贄を貢進している。衛門府は検非違使の本官であり、検非違使は経済的に重要な役割を果たしていた（以上、加地・中原）。

以上を要するに、検非違使は平安期以降、淀川流域の河津における警察活動に従事していたが、それ以上に、京都から西国へのルートをはじめとする水陸の交通路確保という重要な任務を担っており、そのための作道や架橋、清掃活動に携わっていた。さらに、天皇直轄の御厨の増設に伴い、検非違使が河・津を管理するようになった。

また、丹生谷哲一氏[9]は、検非違使制と中世身分制とは不可分の関係にあり、検非違使制が中世賤民、非人＝キヨメ身分の形成と構造に果した役割は、決定的であったと指摘される。すなわち、検非違使制は、天皇と非人＝キヨメという、中世身分制における両極を媒介するかなめの役割を担っていたとされる。たとえば、公的清掃行事ということが平安時代以来検非違使固有の職掌となっており、検非違使庁と散所、とくに清掃散所とは、掃除＝キヨメということを介して本質的な関係を有していた。また、丹生谷氏は、検非違使の任命条件として、容儀・才学・富貴・譜代・近習の五つがあげられていることを指摘し、刑場などでの華麗な服装については、罪が同時に穢とも観念されていた中世社会においては、処刑の場がキヨメの場でもあったところから、儀礼・秩序・キヨメの統括者という職務上、「美装」が求められたとする。また、検非違使の「富貴」という条件には、非人施行の問題があったとし、中世社会においては、非人はまた罪穢の人と見なされていたから、非人への施行は、滅罪浄穢の行いとして検非違使の職務であり、そのためには「富貴」でなければならなかったとされる。

さて、以上みてきた検非違使の職掌は、摂津渡辺の武士集団である渡辺党のあり方とも密接な関係があることに気付かされる。この点を、前掲加地、中原両氏による『中世の大阪』により確認してみたい。渡辺の地は大江御厨の一部であり、渡辺氏はこの大江御厨の渡辺惣官に補されていた。渡辺系図によれば、渡辺惣官の最初は渡辺伝で白河院政下のこと。これは、資料的に見て事実の可能性が高い。惣官とは供御人の統括者のことであり、内蔵寮の支配を受け、内蔵頭から任命されたと考えられる。渡辺氏が、渡辺の惣官に補された背景には、この氏が代々蔵人所の滝口に補されていたことと関係する。供御人の管理者は官人が多く、渡辺氏も蔵人所の職員として供御の納入のために惣官に補された。特に、滝口は任官するとやがて馬允から衛門尉に補されるのが一般的であり、検非違使の本官であった衛門府の官人としても、淀川下流の要所の警護管理が必要であった。渡辺氏の官人としての役割もこのあたりにあり、渡辺氏は惣官として渡辺津の管理にあたり、津の警護や物資の点定、橋の修理、供御人の統括などさまざまな役割を果していた（以上、加地・中原）。

ちなみに、『渡辺系図』[10]により、伝以下の渡辺党の面々の官職を瞥

見していくと、次のようである。

伝　白川院仕、滝口、源大夫、従五位下、惣官
双　堀川院仕、滝口坊門、左馬允
重　鳥羽院北面、滝口
満　鳥羽院北面、滝口、左馬允
親　滝口、惣官、左右衛門尉
調　鳥羽院武者所、源次
備　崇徳院仕、滝口、左馬允
授　渡辺惣官、兵衛、薩摩守
与　源太、左馬允
昇　滝口、左馬允
競　渡辺、滝口
知　後白河院武者所、左馬允
悟　滝口、左衛門
学　高倉院仕、滝口、刑部丞
及　源次、兵庫頭
生　後鳥羽院仕、源八
定　後堀河院仕、源大夫
集　後堀川院武者所、滝口、源次
運　四条院滝口仕、惣官、左馬允、左衛門尉
有　源三、兵衛尉

これらをみると、渡辺党の一族が、代々ほぼ同一あるいは類似の官職に就いていたことがわかる。たとえばその一人、満を例にとると、満は鳥羽院に仕えると同時に蔵人所によって滝口に補されており、衛門府により左馬允に補されている。或いは、運は、四条院院仕、滝口、渡辺惣官、左馬允、左衛門尉の官職に就いている。そして、検非違使は令外の官であるため系図には注記されないが、渡辺党の面々が検非違使としての活動を行っていたことは、上記の状況からみて容易に推測できる。

検非違使は左右衛門府職員が「使の宣旨」により兼任するのが原則であった。[11] 検非違使庁の別当は、参議・中納言で衛門督を帯びる者が任命され、その発する別当宣は勅宣に準ずる権威を持つ重職であり、佐は別当を補佐するところから、家柄・人物を選んで補任された。尉は、検非違使庁の実務の中心を担う職員で、法律に精通した明法道出身者や武力に秀でた者が任用された。このうち、武力に秀でた者は、追捕尉といい武士が起用され、少尉を原則とした。以下、志、府生、火長によって検非違使庁の組織は構成される。

話を本節の冒頭に戻せば、この物語が、渡辺、鳥羽等といった淀川水系の渡渉地と、それを管理する検非違使や渡辺惣官といった人々と深く関わる中から生み出されてきたものであるという蓋然性は、かなり高いものと思われる。渡辺橋供養がこの物語において重要な位置を占めるのは、彼等が渡渉地の橋の管理に携わることと関連があると思われる。以下、このあたりの事情が、延慶本『平家物語』の文覚発心説話にどのような影を落としているかをみてみたい。

三　鳥羽の刑部左衛門尉渡の原像

すでに述べたように、鳥羽の刑部左衛門尉渡という名には、明瞭な

意味が刻印されている。鳥羽は何度も指摘したように、京郊の要衝たる港津であり、刑部左衛門尉という呼称は、あきらかに検非違使としての職掌を意味すると考えられる。そして、渡とは、まさに渡渉地のそれを意味して、象徴的である。そして、延慶本『平家物語』におけるこの物語の中で、刑部左衛門に対して見え隠れする蔑視の意味も、そのあたりにあると考えられる。前述したように、丹生谷哲一氏[12]は、検非違使制と中世身分制とは不可分の関係にあり、天皇と非人＝キヨメという、中世身分制における両極端を媒介するかなめの役割を担っていたと指摘されている。そして、検非違使組織内部に賤視される非人を抱え込んで、刑場その他の清目機能を担っていたこととも関係するものであろう。その意味で、検非違使という職制は、或る種境界的意味を有するものである。

説法半時ニ及テ、二瓦舟一艘ゾ下リケル。下人、冠者原ニ至ルマデ、サワ〳〵トシテゾ見ヘケル。中ニアジロ輿、二張アリ。橋ヨリ上一段計ノ西ノ岸ニ属。ヤガテ輿ニ乗リ座敷ヘ入ル。輿ノ金物、大刀、具足、力者、法師ニ至マデ、ツキ〴〵シク有リケル間、「何ノ座敷ヘ入ヤラム」ト見程ニ、ヤガテ並ノ壺ニ入ル。盛遠具足ニ化カサレテ、主ハイカナル人ヤラムト、ヒタスラノゾキ居タルニ…。

これは、刑部左衛門の妻が渡辺橋供養の儀式見物のために鳥羽の里から船で淀川を下り、渡辺に到着する場面である。かなり具体的な記述であるが、全体を通して伝わってくるのは、この一行の装いの仰々しさであり、その華麗さであろう。渡辺橋の「上一段計ノ西ノ岸」に船を着け、女房を乗せた輿は金物細工で飾り立てられ、豪華な大刀や具足を身に纏った力者や法師等の従者を引き連れて、見物の座敷に入ってゆく。橋供養という行事が、一種の祝祭空間を形成するものであったことが、これによってみてとれるし、この一行の様子が、一種芝居がかったものであることが、船の到着時の周囲のざわめきからも伝わってくる。これみよがしの一行の風情に、盛遠はその主の顔を確かめようと座敷の中を覗き込もうとする。その点で、「盛遠具足ニ化カサレテ」という表現には注意を要する。

延慶本では、女房も盛遠も儀式の見物者というにすぎないが、これが、『源平盛衰記』となると、盛遠自身が橋供養の奉行を務めたということになっており、それはそれで、前述のような渡辺党の職掌からみて、不自然ではない。しかし、後述するような延慶本のストーリーに即せば、これは、適当ではない。

盛遠紺叢濃の直垂に、黒絲縅の腹巻に袖付けて、折烏帽子係にかけ、銀の蛭巻二筋通して巻きたる長刀左の脇にはさみ、其の日の奉行しければ、辻々固めたる兵士共下知し廻して、橋の上に立渡り、ゆゝしくぞ有りける。[13]

これは、奉行として立ち働く盛遠の描写である。また『源平盛衰記』では、女房は盛遠の内戚の姨母の娘という設定であり、左衛門尉渡も渡辺党の一門としている。その意味で、『源平盛衰記』の文覚発心説話は、渡辺党一族の物語という性格をより濃厚にしている。

さらに、四部合戦状本『平家物語』となると、渡辺橋は盛遠の父持遠が架けたものとし、橋供養の行事にも触れている。鳥羽の刑部左衛門の妻は、京都七条西洞院の住人市佐と、夫の死後、世佐の尼と名乗る女性との間にできた娘であるとしている。橋供養の時、橋を最初に

渡る者は、罪障を滅することができるということで、この女房が一番に渡った。そして、持遠は浄衣を着、花篭を持って渡り、盛遠は薪を担って渡ったとする。この記述が宗教的、或いは民俗文化的にみてどのような意味を持つものか、いま詳らかにすることはできないが、四部合戦状本のこの簡略な記述の背後に、まとまった伝承があったことは想像にかたくない。

このように、『平家物語』の各テキストに限っても、橋供養の場面描写にはいろいろなヴァリエーションがあり、中でも描写が詳細なのは、延慶本である。渡辺橋供養は、その歴史的事実[14]を背景として、まさに「希代ノ勝事」として、淀川水系に生きる人々の脳裏に刻印されるべき事柄ではなかったか。その意味で、この橋供養のモチーフは、単に盛遠と女房の出会いを語る物語の一場面というにとどまらず、当該説話の核心をなす要素とみるべきであろう。そうであればこそ、書承文献にかぎってみても、鎌倉期の延慶本『平家物語』から近世初期の御伽草子に至るまで、文覚発心説話のほとんどが、渡辺橋供養のモチーフを持ち伝えたのである。

さて、話を延慶本の上記の叙述に戻したい。刑部左衛門の女房一行は、そのいでたちの豪華さ故に周囲の耳目を集めた。それは、すなわち、夫刑部左衛門の富裕ぶりを示すものであろう。このことは、物語の終盤に至って、

日ノホド酒宴、夜ニ入ラバ管絃連歌アルベシ。其ノ後カヘルベシ。刑部左衛門酔ムズラム其ノ夜伺ヒ給ヘ。刑部ガネドコロハ、酒宴ノ家ヲ一ツ隔テ西ニアタリタル屋也。常ニ東山ニ出ル月ヲ見ムト東ニムケテスメリ。

と紹介される暮らしぶりからも窺えるところであろう。

しかし、その一方で、延慶本の刑部左衛門は、周囲の蔑視の対象となっている。この点については、すでに言及[15]したことがあるので、詳細はそちらにゆずりたいが、女房の母尼公が、盛遠の願いを容れて、既婚者である娘を盛遠に取り持とうとするのは、婿刑部左衛門に対する蔑視故である。つまり、母にとって娘の結婚は意に添わないものであった。悲劇の発端は、その母の思いにある。では、母尼公にとって娘にふさわしい相手たる盛遠は、延慶本ではどのように描かれているのであろうか。盛遠の地位は、この小稿冒頭で引用したように、上西門院武者所として宮廷に仕え、武威を発揮したとある。前述したような渡辺党のあり方からして、格別異とするにはあたらない。それでは、母尼公自身の出自はどのようなものであろうか。

・我身昔ハ諸宮諸院ヲ経廻シテ、好色遊宴ノ方々サリトモ多コソ見知リ給ラメ。

・我身今ハ廃レ者ナレドモ、昔申シ承リシ人ノミコソオワスレ。遠国マデハ叶ワズトモ、洛中ニテハイヅレノ御方ナリトモ、又六波羅ノ人共ノ姫共ナリトモ…。

これは、盛遠の悩みが恋患いであると推量した母尼公の盛遠に対する言葉である。尼公は、かつて自分が京中の「諸宮諸院ヲ経廻」し、権門貴紳に顔見知りが多いところから、どこの女であろうとも、恋の取り持ちが可能であると述べる件である。「好色遊宴」云々とあるところから、母尼公の前身は、京中の権門貴紳を経廻する遊芸の徒であったことが推測される。尼公の価値観からすれば、かつての洛中における「諸宮諸院」における「好色遊宴」の世界こそが、まばゆいばか

りの輝きを持つものであり、その点で、「上西門院ノ武者所ニテ、久シク龍顔ニ仕ヘ」た盛遠の経歴は、尼公にとって娘の婿にふさわしいものと映じたのであろう。

一方、娘の現在の夫、刑部左衛門は、その富貴とは別に、「目ザマシキ」者として差別される側面がある。この点については、やはり前掲丹生谷哲一氏[16]が指摘されるように、中世身分制における刑吏、すなわち検非違使の問題を考えるべきであろう。検非違使がその職掌に由来する「ケガレ」を担いつつ、その条件として富裕や「美装」が要求されたことは、この物語を読み解く上でも、興味深い事実である。

四　まとめにかえて

文覚発心の物語については、古くから中国の東帰（京師）節女説話が種本であるという説がなされており、事実、鎌倉期の成立である延慶本『平家物語』も文覚説話に並ぶかたちで、東帰（京師）節女説話を記している。文覚という歴史上の実在人物の発心説話が成立する段階で、この中国種の物語が素材となったことは、否定できない事実であろう。しかし、その一方で、文覚のこの物語が、どのような成立基盤を持ち、中世から近世に至る長い時間の中で、どのような伝承基盤を有していたかを考えることは、それなりに意味があることと考えられる。以上は、その周辺の問題についての若干の考察である。

注

(1) 以下延慶本『平家物語』の引用は、勉誠社翻刻本に拠り、読みやすいように適宜表記を改めた。

(2) 以下の淀川の概要については、平凡社版『日本歴史地名大系』大阪府篇に拠る。

(3) 平凡社版『日本歴史大事典』「渡辺」の項に拠る。

(4) 加地宏江・中原俊章『中世の大阪』（松籟社）参照。

(5) 吉川弘文館版『国史大辞典』「鳥羽」の項に拠る。

(6) 『続群書類従』六下所収「遠藤系図」に拠る。

(7) 青山幹哉「見せる系図と他見をゆるさない系図」発表要旨（伝承文学研究会平成一五年度大会　南山大学）

(8) 注(4)加地・中原　一五頁以下に拠る。

(9) 丹生谷哲一『検非違使』（平凡社　一九八六）に拠る。

(10) 『続群書類従』五下所収「渡辺系図」に拠る。

(11) 平凡社版『日本歴史大事典』「検非違使」項に拠る。

(12) 丹生谷注(9)に同。

(13) 『源平盛衰記』の引用は、藝林舎版通俗日本全史本に拠る。

(14) この期の渡辺橋の架橋については、東大寺大仏勧進聖俊乗坊重源の手によってなされたことが重源自筆の『南無阿弥陀仏作善集』の記述によってわかる。なお、この重源が渡辺党の出自であることについては、近藤喜博氏の考証（「文覚譚の渡辺党」『南都仏教』一三号）がある。

(15) 小林美和「文覚発心譚再考」『平家物語の成立』（和泉書院　二〇〇〇）所収

(16) 丹生谷注(9)に同。